

◇ 7月の天文暦 ◇

日 時	記 事
1 5	水星東方最大離隔
2 17	半夏生 (太陽黄経 100°)
3 5	望
5 21	地球遠日点通過
5 23	木星合
8 10	月最遠
11 7	下弦
18 13	朔
20 10	月 最近
23 16	大暑 (太陽黄経 120°)
25 4	上弦
27 ^d ~ 1 ^d	水瓶座 δ 流星群



W

leading と称するのであるが、このことは渦状星雲の理論的モデルを考えるうえで大切なこととなる。この星雲は視線速度から、N側が接近の運動を示すことは明らかなのであるが、中核をはさんで短軸のどちら側が近いかが問題点となる。リンドブラッド一派は、吸収物質は腕の内側(凹部)に沿って強い分布をしているとの立場から、光の弱められてる方が遠い側であり(普通に吸収物質は腕に一様分布しているとすると、反対の結果となる)、Eが近い側で、したがって腕は leading であると主張した。一方ヴォークルールは、中核部の光の補正を詳しく行ない、中核の光の一部はW側の暗条の下から見えていて、Wが近い側で腕は trailing であるとの見解である。

非常に特異な星雲は別として、普通の渦状星雲の回転と腕との関係は、皆同一(trailing か leading のいずれか一方)であろうと考えられる。われわれの銀河の腕は、電波の結果では trailing であるらしいが、これをもって軍配を上げるにしても、吸収物質の分布までさかのぼって否定するのは、それが限られた薄い層の問題であるだけに、いささか早計と思われる。(U)

星雲めぐり(4)

星雲は必ずしも視線方向に、都合よく顔?を見せてくれるとは限らない。前回のように見事な渦状腕が見られるのは、視線に対する星雲の回転面(銀河面)の傾角(i)が直角に近いからで、例えばおとめ座 NGC (Sa/b, $i \sim 6^\circ$) のような場合は、中央にくっきりと吸収帯がよぎり、腕の部分は扁平な円盤状の部分を示し、中核のふくらみと、球状星団と推定される星の凝集部分が球状に分布し、ハローもうかがえるという、違った趣を味わうこともできる。

写真の NGC 7331 (Sb) は、適度の傾角($i \sim 15^\circ$)をもった渦状星雲のため、しばしば回転と腕のパターンとの関係について、議論の材料に選ばれる星雲のひとつである。星雲の回転方向にたいして、腕が巻きこむような状態を trailing、逆に腕がほぐれるような状態を

東京における日出入および南中 (中央標準時)

Ⅶ月	夜明	日出	方位	南中	高度	日入	日暮
日	時分	時分	時分	時分	時分	時分	時分
1	3 50	4 28	+29.7°	11 45	77.6	19 1	19 39
11	3 55	4 33	+28.5°	11 46	76.7	18 59	19 37
21	4 2	4 40	+26.6°	11 47	75.1	18 54	19 32
31	4 11	4 47	+23.8°	11 47	73.0	18 48	19 24

各地の日出入補正值 (東京の値に加える)

(左側は日出, 右側は日入に対する値)

分	分	分	分	分	分
鹿兒島 +47	+27	鳥 取 +22	+22	仙 台 -12	+3
福 岡 +43	+32	大 阪 +20	+15	青 森 -18	+11
広 島 +32	+26	名古屋 +12	+10	札 幌 -28	+15
高 知 +30	+20	新 潟 -3	+9	根 室 -46	+1

